

巻 頭 言

私は、1984年から2009年まで25年間、フランスに居住した。この間、ヨーロッパは大きく波打った。

私が訪仏したころ、すでにヨーロッパ共同体（EC）が存在しており、その以前から模索されてきた「1つのヨーロッパ」への道は進んでいた。1989年にはベルリンの壁が崩壊。これが、イデオロギーによるヨーロッパ域内の対立に終止符を打つ、言わば1つの象徴的なできごとであった。

壁が崩壊した頃、私は、所用で外出中で、テレビのニュースを見ることができないうところにいた。ただ、パリの町中が何となくざわめいているのを感じ、慌てて家に戻りテレビをつけた。すると人々が壁の上によじ登り、歓喜の中でツルハシなどを打ち下ろし壁を壊す、あの有名なシーンが幾度も幾度も、繰り返し放映されていた。人々にとって、それは長年ヨーロッパに重く垂れ込めていた雲の切れ目から、太陽が顔を出したような感覚だったのだろう。

93年には、ヨーロッパ連合（EU）へと発展していく。さらに、99年には、EU加盟国と完全に重複するわけではないが、単一通貨ユーロが導入される。

ユーロ導入のときのことも鮮明に記憶している。もちろん、その何カ月も前から周知徹底されており、人々は換金の必要性は感じていた。私も、その1人である。しかし、99年1月1日に実際に導入されてから、慌てて換金するためにATMに走ったところ、機械が札切れで出すことができなかった。買い物をするたびに、頭の中で旧通貨であるフランで計算し高いか安いかを見極め、ようやく払うということが2年ほど続いたように思う。商店には、長らくユーロと旧フランの双方の値段表示がされていた。

これら、一連の出来事は、言わば人間社会の1つの壮大な実験であろう。ヨーロッパは、民族の移動、領土の奪い合い、宗教間の相克、イデオロギーの対立によるものなど幾度も幾度も戦乱を経験し、その教訓として1つになる道を選んだ。ヨーロッパの国々が、平和に互いに存在しあっていくためには、これし

か方法がないということなのだろうと思う。

当初、デンマークなどでは国民投票で否定されるなど、難産の末誕生した EU であるが、まだまだ成人に達したとは言えない。イギリスは、今年6月の国民投票で離脱を決定した。それに伴って、残留支持者の多いスコットランドは、再び独立運動が盛んになる兆しを見せている。フランスなどでは、極右勢力が勢いづき離脱をほのめかしている。そうなれば、バスクやカタロニア、北アイルランドなどの独立運動が、また激しさを増すことになりかねない。加盟国であるギリシャも、財政破綻寸前で国が揺れている。イギリスの EU 離脱は、ヨーロッパが先祖返りする始まりなのだろうか。

ヨーロッパは今、新たな問題を抱えている。シリアなどから流れてくる多くの移民を受け入れるべきかどうか、苦悩が深まっている。反対派からは、域内の通行の自由を認めたシェンゲン協定を見直すべきだという声も聞こえてくる。

仮に移民をすべて受け入れれば、ヨーロッパがヨーロッパでなくなってしまうと言う人々もいる。つまり、ユダヤ・キリスト教文明が、イスラム文明に侵されてしまうという危機感さえ漂う。しかし、文明の衝突はなんととしてでも避けねばならない。民主主義、自由、平等といった言わば人類の普遍的な価値を創り、それらをもって、今日まで、数多の障害を乗り越えてきたヨーロッパである。必ず、知恵を絞り、この人類初の実験を成功に導いていくのではないかと思う。

今回、本学の EU 研究会が、その研究成果を1つにまとめた。1人でも多くの方に読んでいただければ幸いである。人類の未来が垣間見えてくるかもしれない。

2016年7月吉日

天理大学学長 永尾教昭